



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第13主日 A年(2023年7月2日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記下 4章8—11、14—16a節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 6章3—4、8—11節

福音朗読：マタイによる福音書 10章37—42節

よげんしゃ 預言者

預言者には、歴史的に見て二つのタイプがあります。神との特別な関係にあって、神の^{とくべつ}ことを伝え、未来の出来事を^{よげん}予言し、奇跡^{きせき}を行うタイプの預言者たちと、神から受けたことばを語り、社会に対して批判^{ひはん}のことばを語り、神への信頼^{しんらい}に基づく確かな希望^{もと}を説いた預言者たちです。前者は「恍惚的預言者」と呼ばれ、集団で日常から離れて行動していました。後者は「古典的預言者」と呼ばれます。紀元前8世紀後半に活躍した預言者アモスからは「古典的預言者」となります。紀元前9世半ばに登場したエリアとエリシャは「恍惚的預言者」と呼んでもいいでしょう。

今日の第一朗読はエリシャの奇跡物語からのものです(王下4章1節～8章15節)。前半には当時の預言者たちの日常生活を垣間見せる六つの奇跡物語(4章1節～6章7節)、後半には戦争と関わる奇跡物語が三つ記されています(6章8節～7章20節)。今日の朗読箇所を含む4章8節～37節では、子のない女がエリシャのことばのとおりにも子どもに恵まれたこと、その子どもが急死し、エリシャによってよみがえったことが語られています。

9節の「聖なる神の人」に注目してください。「裕福な婦人」(8節)は、食事を提供するという関わりの中でエリシャが「聖なる神の人」であることに気づきます。上に述べたように、預言者には日常生活から離れて奇跡を行うタイプと、日常の中で神のことばを語るタイプとがありました。エリシャは前者のタイプ、すなわち「恍惚的預言者」に分類されるでしょうが、ここでは、日常生活の中で子どもがいなかったという現実を通して神が恵みをくださることが語られているのは興味深いです。特別な体験が神の力の現れを示す時代は終わり、日々の生活での神との関わりが問われる時代が始まったことを暗示しています。

第二朗読では11節の「キリスト・イエスに結ばれて」をここに留めてください。この節の「結ばれて」を表す前置詞エンをはっきりと表す訳し方を試みてみると「キリスト・イエスの中で」となります。同様に、1節の「キリスト・イエスに結ばれるために」も直訳すると「キリスト・イエスの中へ」となります。さらに「またその死にあずかるために」も直訳すると「その死の中へ」となります。人は「キリスト・イエスの中へ」と洗礼を受けて、キリストと同じように「死の中へ」と入れられました。こうして、人は「キリスト・イエスの中で」生きるようにされるのです。

今日の福音朗読の構造を見てみると、三回にわたって「ふさわしくない」が繰り返され(37,38節)、同じように三回「報い」が繰り返されます(41,42節、原文には「~の名の故に」という表現も三回繰り返されています)。その間にある39節と40節は同じような文章の構成が原文に見られます。39節と40節を中心に37-38節が前半、41-42節が後半となるでしょう。

「ふさわしくない」の「ふさわしい」は、ギリシア語でアクシオスといいます。計量するはかりと関係があることばで、天秤にかけた二つのものが釣り合っている状態を指します。『ルカによる福音書』では放蕩息子が家に帰ったとき、「もう息子と呼ばれる資格はありません」と父親に語ります(ルカ15章19、21節)。ここでもアクシオスが使われています。お父さんの子にはふさわしくないという息子の告白です。また、洗礼者ヨハネは「悔い改めにふさわしい実を結べ」(マタ3章8節)と呼びかけます。ここもアクシオスです。天秤の片方の皿にはイエスさまが求めた悔い改めが乗っかり、もう片方の皿には人間の生き方の転換が乗っています。上手にバランスが取れていればよいのですが、往々にして生き方の転換の皿が跳ね上がってしまいがちです。

イエスさまより家族を愛する者はイエスさまにふさわしくないと今日の福音は教えていますが、自然と生じる家族への愛情を無条件に捨てなさいと勧めているのではないでしょう。というのも、10章全体が差し迫った迫害を前提として弟子たちに語られた勧めの説教だからです。「弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である」(10章24-25節)がこの説教の中心主題です。イエスさまは弟子たちよりも前に迫害と十字架で苦しみました。そのイエスさまに倣う弟子たちは師であるイエスさまのようであるべきで、しかも弟子たちの苦しみは、師であるイエスさま以上のものではなく、師が共に担ってくれる苦しみなのです。